

令和3年 12月18日

言葉の処方箋

いい覚悟で生きる 樋野 興夫 P49

いのちに期限はありません

いのちとは、今生きているこの瞬間、時間そのものです。
生きている限りは、いのちの時間が続いています。

「あと3か月、ですね。予想よりも進行が早い、と言われました」
進行がんの患者さんが、医師から余命告知をされたと言うのです。

「もう生きていても仕方ない、そんな気分です。このまま、最後の日がいつ来るか、いつ来るかと怯えながら生きなくてはならないのでしょうか」

一緒に来ている患者さんの家族も、言葉を失っています。

「私には3人の子供がいます。下の子はまだ3歳です。この子たちを遺して自分が先立つなんて考えたこともありませんでした。子どもたちはしっかりと生きていけるだろうか、幼い子どもたちが、将来、私のことを覚えていてくれるだろうかと思うと不安で、いつそのこと……と思うときと、この子たちの記憶に残るまでは死ねない、という思いが交互にやって来るのです」

患者さんの葛藤が痛いほど伝わってきます。お子さんたちの未来には、当たり前のように患者さんが親として寄り添っていたはずなのに、それがかなわなくなるのです。

この患者さんにもっとも必要な言葉はなんだろう。

「いのちに期限はありませんよ」

思いを巡らせた結果、この言葉を贈りました。

医師は、検査や診察の結果を伝えるために、余命という期限をつけます。ですが、余命は確率70パーセントの判定です。鵜呑みにする必要はありません。現に、がん哲学外来メディカルカフェには、余命3か月と言われて10年以上経つ患者さんや、何度も余命告知をされたという患者さんが来ています。

いのちとは、今生きているこの瞬間、時間そのものですから、誰にも期限を決めることなどできないはず。生きている限りは、いのちの時間が続いています。

どんなに苦しいときでも一日と思えば耐えやすく、楽しみもまた、一日と思えば度を越すことはない、と聞いたことがあります。今日、今のこの時間を大事に生きること、一日一日に自分の役割を見出すこと。それを怠って先のことを考え、不安になっても、人生はおろか明日すらないかもしれません。誰もが、「明日から」となすべき事を先延ばしにせず、生きている限りは人としての成長をしていきたいものです。

この患者さんは、お子さんたちひとりひとりと一緒にお風呂に入りながら、将来の夢のことや自分がいなくなっても笑顔で生きること、思い出を毎日たくさんつくることなど、お湯にのぼせるくらいたくさん話したことを、半年後、再訪したカフェで報告したそうです

今後の予定 1月8日(土) 2月12日(土)

主催 岡倉天心記念 がん哲学外来・巣鴨カフェ「桜」
後援 一般社団法人がん哲学外来

